

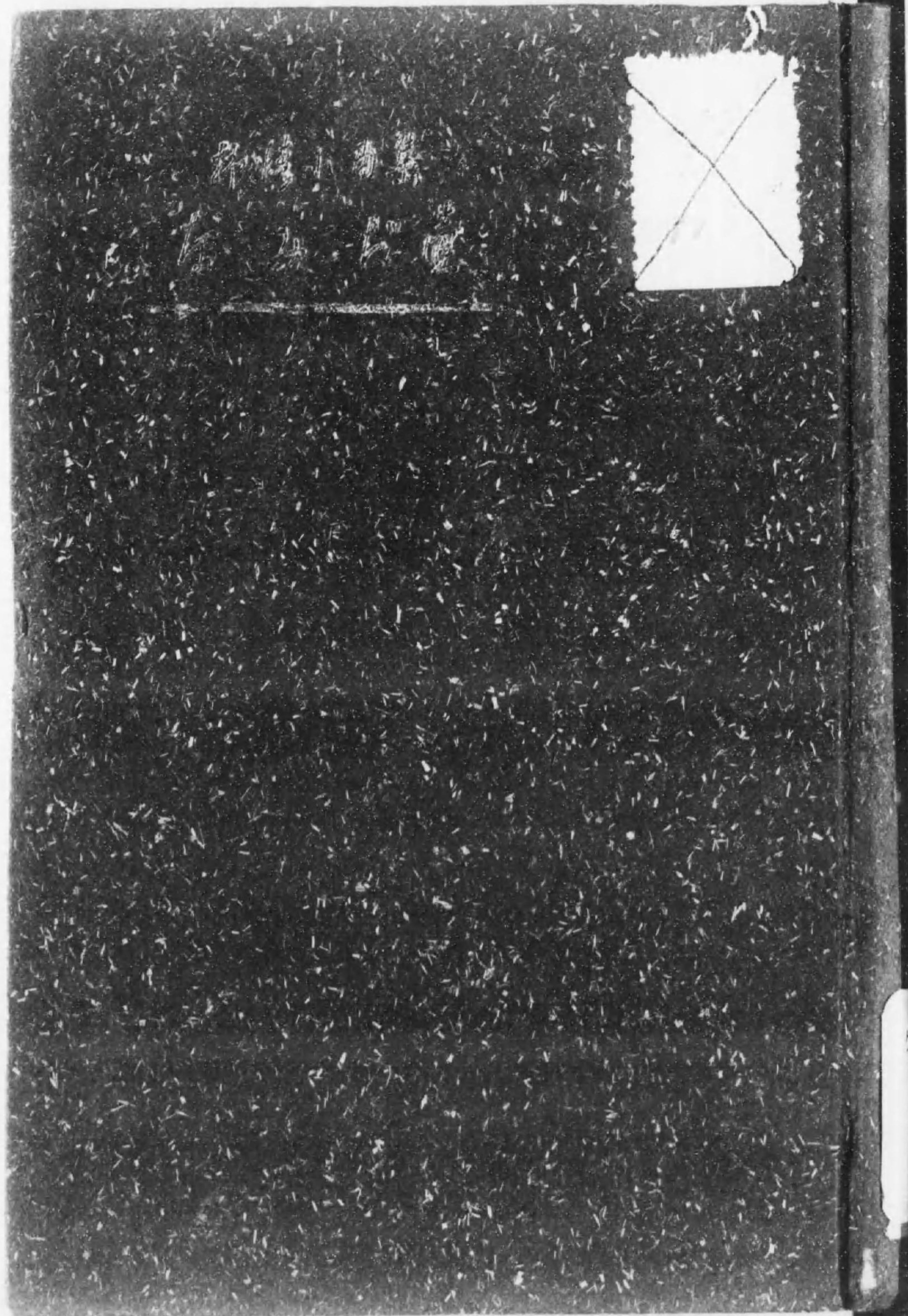
~~292~~  
~~415~~



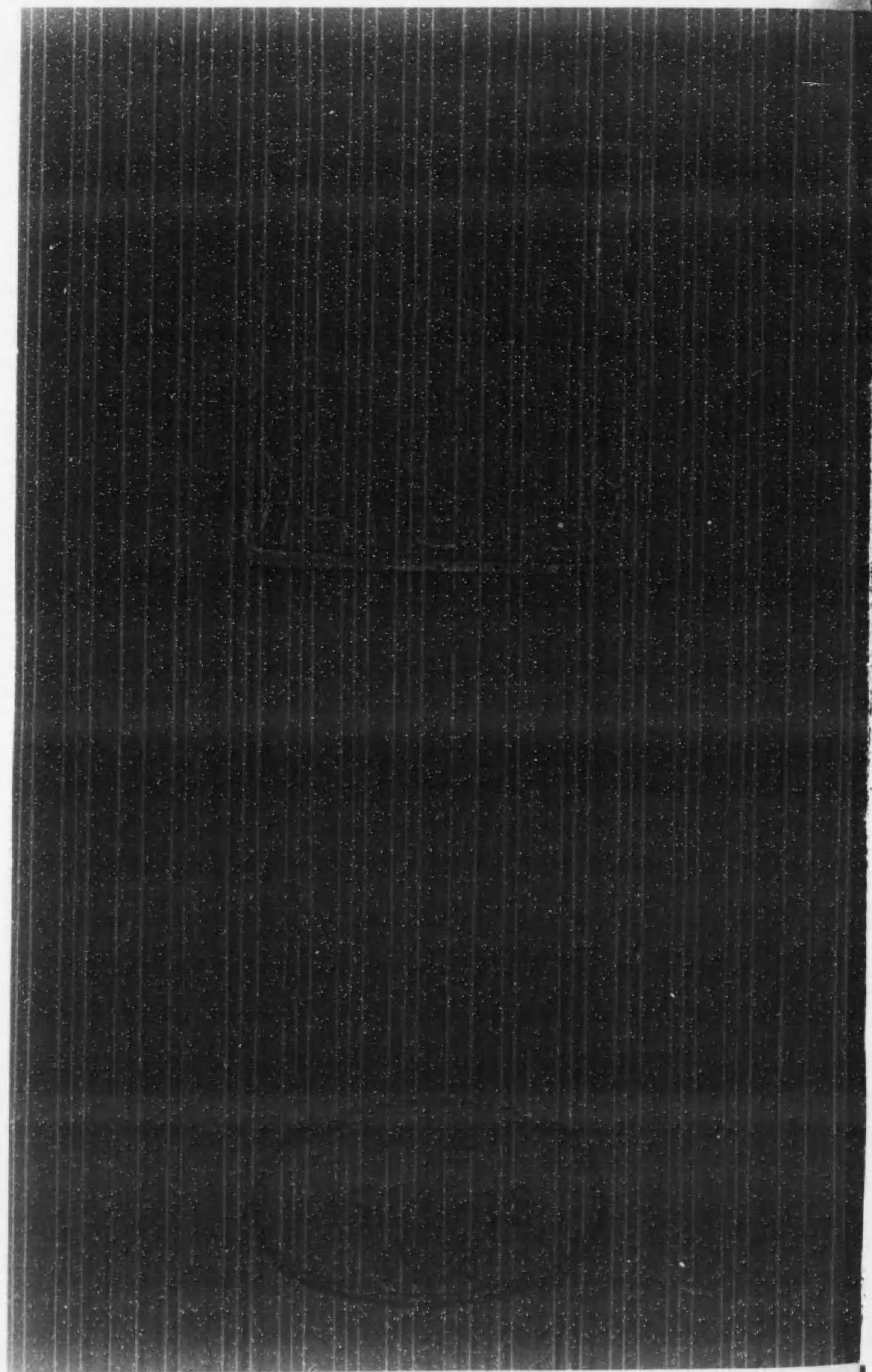
始













持109  
934

— 1 —

## 序

私が作に従てから五年にもなる。永いとも思はれるが古い作品に觸れる時は當時の初々しい心持が今も明瞭感ぜられる。

十八の頃だつた。觸れてはならぬものになほ觸れてみたいやうな、心持で内證で筆を取てみた。その都度恐しい事を犯したやうな氣がして書いた



ものを一つ一つ机の引出やら行李の底やら人目に附かぬ場所へ丁寧<sup>に</sup>仕舞込むだ。母や兄に引出しなどへ觸れられる事を一番怖れた、何故か悪い事を發かれるやうな氣がしてならなかつた。誰に見られる事も好まない、自身でも敢て見ることをせずに来た作品が三百篇餘りに昇て居た。

私の悲しい性とでも言ふか、幼い頃より獨り居ることが好きだつた。人誰もが『強い人』のやうに思われてならなかつた。他の子供達が、春の日

夏の夕べなど陣取り人取り鬼ごっこ、で騒ぐを、獨り二階の窓から眺めて居た、それで別に羨しい心も起らなかつた。私には仲間にも入らずにひとり居る方が反て嬉しかつたからである。

ひとりの中に入混て話をすることは、可成りの努力と快斷力とを要するのが常であつた、それで一度仲間に入ると思切り大膽に騒ぐのであるが、それでもまだ獨りに戻る味を忘れなかつた。『面白い兒だ』と騒ぎ仲間は言てくれた。永く交際して來



た僅の友は『涙脆い』と言ふどちらも私を知てくれる人だ、が、『悲しい性』の両面を知てくれる人はよりよく私を知てくれる、有難い人である。

處々に仕舞込まれた作品を探出して目を通すとその時分の私がるで他人のやうに美しく感じられる、いぢらしさに涙を催ふことすらある、何時までもこのやうな可憐さを持って居たい氣も起る。人知れず作て仕舞込むことが、年と共に、荒みゆく世を知り人を知る自分の唯一の慰安となつてし

まつたのだ。人間は誰しも心の中に等しく歌ひたいものを持つて居る筈である。秋の暗闇にも蟲は啼合ふ、本集を読む人々よ荒みゆく世に、聲を和して歌ひ合ふではないか。

大正十四年十月二十八日

咫 香 端



小言

本集に輯めたものは十八の頃よりこと五年間ばかりの作、三百篇餘りある中より抜出したものである。『濡れた砂原』に輯めてあるもの最も古く、終りに近づくに従て新しい。『硝子の圍ひ』は最近の作である。

寒い北國に住みし、幼き日四年の『想出』今年の『伊豆行き』は他日出したいと思てゐる

— 1 —  
目次

濡れた砂原

とはに……………一

落葉……………三

濡れた砂原……………五

澄みし聲音……………六

破れしころ……………八

罪びと……………九

焔……………二

汀……………三



日蔭の花……………	一三
君忘れしか……………	一四
トランプ……………	一五
夏の夜あけ……………	一六
旅の踊娘……………	一九
涙つぼ……………	
涙つぼ……………	二五
あし跡……………	二七
金の罫……………	二八

君はゆきます……………	三〇
けれどもやはり……………	三二
處女の祈……………	三四
落人……………	三七
晝の月……………	三九
唯一つ故……………	四〇
妹のよめる……………	四一
舟の月影……………	四三
馴れし小鳥……………	四四



乙女に秋……………四六  
 白蠟の精……………四七  
 雪 空……………四九  
 軒の雫……………五一  
 罪びとの子の歌える……………五三  
 蓮池の月……………五五  
 悪 魔……………五七  
 美しい人……………五九  
 落葉焚く乙女の語れる……………六一

變れる面……………六三  
 叔母の墓……………六六  
 今日も亦……………六六  
 悲しい日……………六七  
 蜥 蜴……………六九  
 夜 霧……………七〇  
 細文字……………七一  
 戀てふもの……………七三  
 滴りのかづかづ



その一	どうしても行くなら	七
その二	矢張り已には	七
その三	逝きし昔は	九
その四	いつそスピード	八
その五	一緒になれねば	八
その六	誰れが	八
その七	小聲で言ふても	八
その八	ひとりほつちに	八
その九	何も聞かず	八

その十	駄目なこと	七
その十一	いつまで子供で	八
その十二	揉消した跡	九
その十三	たまにや獨りで	九
その十四	こわい顔	九
その十五	自分のもの	九
その十六	夜は明ける	九
その十七	たつた一言	九
その十八	病院の窓	九



その十九 リボン ..... 九五

その二十 嚙まずに呑だ ..... 九六

その二十一 ほくろ ..... 九七

その二十二 氣付かず過ぎす ..... 九八

その二十三 戀の糸 ..... 九九

その二十四 何が悲しい ..... 一〇〇

その二十五 手折らず ..... 一〇一

その二十六 當り矢 ..... 一〇二

その二十七 ほのかにあかし ..... 一〇三

その二十八 今宵も ..... 一〇四

その二十九 影法師 ..... 一〇五

その三十 何時まで待つも ..... 一〇六

その三十一 二人の私 ..... 一〇七

口 笛

待たずに居ても ..... 一一一

暗 き 窓 ..... 一一三

果敢なき夢 ..... 一一五

ソーダ水の泡 ..... 一二六



見逃すとも……………二七  
口 笛……………二九  
いとしくばこそ……………三〇  
蚊……………三三  
蟹の墓……………三四  
山百合……………三五  
氣附かざりし扉……………三七  
ピンセット……………三八  
名乗れぬ親……………三九

今宵の月……………三三  
女王の裳……………三四  
變らぬ色……………三五  
梳 毛……………三六  
白 指……………三八  
時……………四〇  
月の碎片……………四二  
月見草……………四四  
かゝる時こそ……………四五



指輪	.....	一四
哀の曲	.....	一四
女王の惱	.....	一五
ピエロ	.....	一五
花ごゝろ	.....	一五
硝子の圍ひ		
火 花	.....	一六
淡き煙	.....	一六
小夜中に	.....	一六

翼無き身に	.....	一六
蕾の儘に	.....	一六
ふみに見る君	.....	一六
忍び倚るもの	.....	一七
初 戀	.....	一七
硝子の圍ひ	.....	一七
鶉 鶉	.....	一七
淀 み	.....	一八
紅	.....	一八



序  
曲

私は探す

星を視つめて

歌える人の世界を。

紺青の尾鰭を覆ふ

丈なす黒髪の棲家を。



私の求めたあとは

島々の根元

細き海草の蔭までも、

されど、——憧憬の世界は

入口もわからぬ。

うしほ沸立つあたりか

厚氷敷く底か、

それとも

常闇の夜の海か

青きひとの世界は。

私は探す

腕は冷え、脚は凍ゆれど

魂の消去るまで

よしや

つめたく骸は浮上るとも。



濡れた砂原



とはに

汀に二つ

頭文字

並ぶも今は

消去りぬ。

草を結びて



誓ひしも

今は枯しを

如何にせん。

「永久とこはに」と言ひし

言葉ことばは

忘れよ、とての

謎なるか。

## 落葉

ひとり忍べる樺の森

下より響く瀧の音、

残少なのさもみぢに

都の君をなつかしむ。

朱あじの落葉を手にとりて



顫える頬にあててみぬ

隙間もれくる夕暮の

淡き光に何時のまか

泪ぐみたる瞳より

落葉もちたる掌たなごころ

したたる露をいつまでも

視詰る胸の寂しさよ

知るや知らずや、はらはらと  
又も落葉のこほれくる。

### 濡れた砂原

夢に見し

淋しき砂原に出たれど、

夢にみし、姿は見えず。



浪の腕<sup>うね</sup>り、蒼き海

濡れたる砂は變らねど、

みどりの鱗、可細き頸<sup>うなじ</sup>

砂に上り泣伏せし

悲しきひとは、影だに見せず。

### 澄みし聲音

明<sup>あ</sup>く朝日は湖水に照り

銀の脾腹の魚は踊る。

目映ゆきひかりに黒髪の顫え

耳もとまでも紅のきみ

さざなみの囁きか、君のこわねか

語りし言葉は微なれど

美しき聲よ、今まなほ消えず。



破れしところ

顛えるあしに霜柱

ふみしめてゆく夜の林

悶えくるしむ若人は

すすり泣くのみ、身を倚すも

疵持つ心は結ばれず。

洩れくるも泪ぐみ

ふたりのおもに青白く  
隔つなけきを知らずして  
あとつけゆくは月の影。

罪びと

戀することが罪ならば  
わたし罪人になりませう。



優しき瞳にもゆるる煙は

寂しき心にうつらすに

靜に消逝くものでせうか

母様みるはつらけれど

わたしは弱い乙女です。

辛いことは知りつつも

君の御足にひれ伏して

共に苦しみ泣きませう。

戀することが罪なれば

わたし罪人になりませう。

### 煙

繼子星のしばたくしたを

身を擦す倚よせてゆくふたり、



蟲もひそめる暗闇に  
燃て狂ふはむねの底  
身も世も焼かん、なさけの燭。

## 汀

自分は見た  
砂間にたわむる水色の海水槽  
近けば消え

汀に書れし跡の残る「戀」。

## 日蔭の花

この花なの  
日蔭に咲いたために色も褪てるの  
お日様に見離されたので震て居るのよ  
それでも  
蝶の舞て来るのを待てるの



君忘れしか

君忘れしか赤き夕陽を  
音なく降る夜の帳を  
別れもえずに語る二人を  
固く握りし汗ばみし手を  
烈しくつたわる胸の響を  
くるしき、熱きあの接吻を。

トランプ

きのふ書いた砂へのハート  
どなたの指先にてか  
丁寧になぞられてある  
風が吹くも  
消えぬやう、深く、はつきりと。



心なくかいたスベード  
いつのまにやら、あらわに  
靴の踵かかとでえぐられてあるに  
もう書くまひ、  
と、泪ぐむ。

### 夏の夜あけ

『明晩も来て下さいね』

逢あて間まもない明あ星ほし  
啼なきひとつかわさぬに  
つれない夏の短か夜は  
東のかたより白みゆく。

『曇ひがて居なかつたらきつとね』  
太陽ひがの前まへに出いられぬ  
悲し夜に住む弱き身は  
あすの誓をなぐさみに



しかたなくなく別れゆく。

「青空でしたら一緒に泣きませう」  
瞬<sup>しほた</sup>く眼にサファイヤの

泪たたえてあけのほし

白むみそらに怖えつつ

名残惜みてきえてゆく。

## 旅の踊娘

坊ちやん嬢ちやん

聞てくれ

旅の踊娘の悲しさは

お白粉つけて、<sup>べい</sup>輕粉つけて

笑た顔から涙出る



あかい夕陽の此頃は  
何故か泪がなほ<sup>に</sup>泌<sup>ち</sup>む

坊ちゃん嬢ちゃん  
きいてくれ  
鞭<sup>し</sup>の痛<sup>と</sup>さ増す日には  
なほ笑わねばならぬ身も  
父様母様居たそうな。

坊ちゃん嬢ちゃん  
きいてくれ  
叫<sup>い</sup>た喉<sup>のど</sup>から出る唄<sup>うた</sup>を。



涙  
つ  
ぼ



涙つば

櫂の動きもなめらかに、  
帆桁の軋おしよは青空へ、

白煙たつ荒磯の

朧が乙女の胸とても

戀も涙もあるものを、



固く閉ざせるむねの扉は  
歸る刻ときさえついあかず

差せる乙女の涙壺

あけてたちたるひと乗せて  
船はゆきまます青海へ。

### あし跡

丘の朝方

すすきの搖ぐ、

一つの足跡三つの小跡

砂原這ひゆく、き蔓つたの長々



母といとし見か、姉と弟か  
一つの足跡三つの小跡、

丘のすゝきの  
軽きうなづき。

### 金の蠅

夕べの夢が氣に懸る

ぢつと動かす嬉しそう  
しかと止て、ついてゆく  
貴方の脊中の金の蠅。

うしろ姿を望むまで  
少しも氣附かぬにくらしさ  
貴方の心もその蠅が——



ゆふべの夢が氣にかかる。

君はゆきます

君は行きます。

淡いかほり

寂しき香の外

何も残さず

冬の日の影のやうに。

ふとすれちがつた、柴の煙やうに。

君はゆきます。

戀とは言われぬ

戀を抱て

私は

淡い君の姿を

見送て居るのです。



けれどもやはり

お友達よ

と、一緒になつたのね

戀すればおしまひ

と、言ひましたのね

けれども貴方はいつも

じつと私の胸においでになるの

あなたも

便りが待遠しいと言ひましたわね

やはり、戀ではないわ

戀すればおしまひなんですもの

別れのはぢめなんですもの



## 處女の祈

マリヤさま……………

悪い人なのでせうか

あの涼しい眸

あの清い御聲のあの方が

お母さまはおつしあるのです

悪いひとだと、

私の處え來る人は皆恐しい人ばかりだと。

どうしても私

恐しい方だとは思われませんの、

あのお聲を耳にすると

胸の底まで透通ります

あの眸でじつと視詰られますと

心のそこまで清められますの

私などには尊くて



觸れることの出来ぬやうな  
美しい手でおいでなのです

涼しい瞳の奥にも

恐しいものが潜めるものでせうか  
暗い胸からも

あのやうに清いお聲が出るものでせうか  
あの方の前に出ますと

ほんとに跪きたいのです。

あの方が恐しい人なのでせうか。

### 落 人

遙に遙に泣濡し

小女の眸のやうな灯の

夜露にぬれて四つ七つ。

務盡たる重き足



君のやさしきほほえみに  
痛さを堪え継りゆく。  
馴ぬ苦しき、旅の身を  
彼の灯のもとに落附けん  
言葉くちに言わねど胸にきめ  
螢火にも似たかたまりが  
冷き夜途を一すぢに……。

## 晝の月

開いた便りもその儘に  
じつとその娘こは空みてた。

頬の泪をぬぐひもせず  
じつとその娘はそら見てた。



空は明く澄みたれど  
色の褪せたる晝の月。

### 唯一つの故

浪はみどりに  
行く雲白し。

堤に残るピンクの海水着

二つ三つなら悩みもせねど、

身動きもせぬ、しほらしさ

唯一つ故私は寂し。

### 妹のよめる

お姉さま

長い睫毛のその奥が



いつも私にわからない  
睫毛にかくれ涙する  
と、思えどいつも御本読み

泣て居るの？

と、きく度に

につこり微笑も口ばかり

泣てゐるよなるないよな

白い藤椅子のお姉さま

### 舟の月影

櫂も捨てよう

梶も離さう

お前がそこで泣くからごらん

影のふたりも離れ離れに泣いて居る。



私達が仲よくしなければ

二人は倚ることが出来やしない

私達は不幸すぎた、せめては、沈む前に  
影の二人を幸福にさせよう。

### 馴れし小鳥

久しく伺ひ馴れし鳥

遠き空をあほぎ、何故か眞晝に聳立てず

胸の軟毛のそれぞれに

青き息を含ませ、餌も啄まず

しばしと放てば、飛びゆく小鳥

石となり、空の青きに入りて戻らず

深き悲みに待てども

馴れし鳥、終にわが胸に歸らず。



## 乙女に秋

秋風たては人戀し  
縋りし林に分け入りて  
密かに君をなつかしむ。  
散敷く木葉を手にとりて  
君の御名を綴らんと。

人につめたき、秋の風  
吹來る度に散らされて  
遠く落葉は舞てゆく。  
跡さえ見えぬ眼の泪  
乙女に悲しい秋の風。

## 白蠟の精

群る蟲を追わんとて



ふつと吹消す灯の  
跡襲ひ來る暗闇に  
ありあり浮ぶ白き顔。

静につぶる長睫毛  
固くとぢたる唇までも  
此世のものと思われぬ  
冷さひそむ白き顔

笑ひもせねば、泣きもせず  
蟲の羽音に消され逝く。  
暗き秋の夜、はかなくも  
白蠟の浮く寂しさよ。

雪 空

暮ゆく雪空、飛くる粉雪



これが綿なら、お前も暖かろ  
わたしの惱も少しは薄らごう

肩の小雪や肩の雪

私の息でも落してやろが

落すも拂ふも又吹積る

暑い筈なる心の寒さ。

これが綿ならお前も暖かろ。

### 軒の雫

「誰、まだ起て居ます」

雨戸あければ小娘の

眸にうつる、戸前のみ

細く光れる絹の雨。



『呼で居るのかしら』

闇の彼方に、敷石に

はた、はた、はた、と訪れる

罪な、屋根よりの訪問者

闇に撒散る糠雨の

髪にかかるも氣附かずに

思を遠くはしらせて

じつと、視詰る君の音、

### 罪びとの子の歌える

きついお人と行きし儘

今だ歸らぬパパ様よ

病のママが待ちまする

疾く歸せ給へママの家。

パパ様好きなものばかり



つけて待てども無い戻り  
夕餉ゆふけの膳ぜんの寂さびしさよ  
ママは黙もくて泣なきまする。

永とこくお歸かへりならぬ故

ママのお家いへをお忘わすれか

かどべべに佇たたみ、灯あかりがとほり

わたしも涙なみだが流ながれます。

## 蓮池の月

蓮池れんちに浮うく、月つきのごと、

君きみの姿すがたの宿とどるやう

獨ひとりり祈いのちを捧たもげませう

月に飛と込む小蛙こゐづの

漣なみだ起たすにゆゆらけども



あとに、又浮く圓き月。

されど、悲しやわが心

文の言葉に百々千々と

君は搖ぎて靜まらず

靜まる間なく、又文の――

見るを厭ふも是非もなや

蓮池に浮く月のごと、

君の姿の宿るやう

獨り祈を捧げませう。

## 悪魔

私を見て、何も思わす居ることは出来ない  
のよ

お心に響かぬやうに装ても駄目ですわ

お顔に漲る血潮が

何も可も語てしまひますの



私を知て、戀をせずには居られないのよ

私は悪者よ、悪魔に定て居ますわ

悪魔と知ても貴方は、戀せずには居られないのです

いくらお心に警告を與ても、

貴方の血潮の強さに及ばぬことがよく解て居ますの

私はあなたに苦痛を教へて上ませう

わたしはどん底まで緒れて行のよ

貴方は苦しむのよ、でもお氣毒とは思わな  
いわ

私は悪魔、貴方を緒れに來た悪魔ですもの

美しい人



私は人を殺した

何時だか知らないが

美しい人だつた

それは涼しい朝

小山の頂。

その人は美しい聲であつた

私の聲が耳に入ると

その人は倒れた

桃色のうすものと、優しい髪とが

朝風にゆれて居た

そしてその人は

呼吸が絶えて居た。

裏山に朝日が當る度に

私は美しいその髪を思ひ出す。」



落葉焚く乙女の語れる

落葉焚く煙の蔭に

無言のまま佇みし人よ、

顫える手に、燃ゆる小枝を差出せば

細き煙草に火をつけし

住所も知らぬ、名も知らぬ  
知るは唯、優しの面差し。

幾度か煙は棚引くも  
再びきませぬ人なれど——

窺れる面

腕に凭れる



青褪めし、窠かごれる面おもの人を  
歎なげけば——

涙すな戀人よ

青きは月の光

泣くは草の葉の秋蟲のみ。

## 叔母の墓

苦むす墓に、とまれる

あはれ

瘠せせ衰おとろへしきりぎりす

寂さびしさのあまり、叔母呼よべば  
可よ細こき聲こゑに應こたへたる



冷えし今宵の月に  
なれも

苔と化すにあらざるか。

### 今日も亦

初めて逢た小川の岸に  
今日も亦。

嬉し泪でもう一度

この頬をあたたためてやりたいと。

だめ、だめ、今日も冷たい泪ばかり

意地の悪い漣が

なつかしい姿を浮べてはくれないのですもの

### 悲しい日

悲しいその日が来たのです。



何時まで離れず居ませうと  
 暗く夾くはあるけれど  
 果敢無き者の住む處。  
 ふたりの名前を結びつけ  
 水に沈めて來たのです。

## 蜥 蜴

知らぬ地に來て身をおもひ  
 丘の蜥蜴トカゲのいとしさに

あほき女は涙する。

丘に佇む唯獨り

赤ねぐも浮くふるさとは

遠く離れて鳥のゆく。

蜥蜴トカゲは餘り美しく

ひとり匍居るいとしさに

あほき女の涙する。



夜 霧

出たるはずの月はなく  
浮べる舟は影のごと

あはれ、濡れたる蜘蛛の巢は  
主<sup>あかぢ</sup>うしなひ、顔に手に  
堪え盡きてか、ひやひやと、

細 文 字

波間に浮び、紫の  
戀も情もなきがごと

夜の狭霧の閉蒙る  
陸<sup>あが</sup>の舟間をひとりゆく。



はしやぐ帽子が、今日もまた。

舟影長く地に匂へば

黒き瞳を砂にすえ

沈む姿は愛するとも

破上すなえになぞる白指の

跡をたどりて誰か知る

「私は片輪」の細文字を。

戀てふものを

戀てふものを知りそめて

悩む心の苦しさに。

暮ゆく野邊に佇みて

赤い夕陽の沈む時



口  
笛

— 74 —

乙女は呼びぬ聲かぎり  
戀しき君の御名をば。



その一 どうしても行なら

どうしても行くなら

行かせませう

美しい流星は

すぐ消えるのです

生て居る事の苦しさを

今知た私ではありません。



その二 矢張り己には

夢なら醒るな、

と思たお前も

夢であれ、

と恨だお前も

やはり

おれにはなつかしい。

その三 逝きし昔は

二人で泣くは

まだうれし

獨で泣くは

唯寂し。



青葉の窓に  
身を倚すも

逝きし昔は

ゆきし儘。

その四 いつそスペード

歳を重ねて、きり合せ

かへした札はハート

幾度も幾度も切たのに

抜てみたらばハートです。

いつそ、スペード出たならば

こんなにも胸も騒ぐまい。



その五 一緒になれねば

泣てわかれたあなたです。

何で思わず居られませう

死よりも辛い別れ方。

離れて居ても猶ないて

何故に一緒に成りませぬ。

一緒になれねば別れたに。

その六 誰れが

私の心は知れる筈、何時も變らぬこの心。

心は變らぬものかしら

誰が心を見たでせう。

誰が心を見せたでせう。



その七 小聲で言ては

小聲で言ては聞とれぬ

大きな聲では言へませぬ

黙て居ても解りそうなもの。

その八 ひごりぼつちに

ひとの心を何時のまか

ひとりぼつちに誰がした

ひとりで始めは居たけれど

ひとりを歎きやしなかつた

ひとりでないよと言といて

ひとり私を置去に



ひとりほつちに誰がした。

その九 何もきかず

死の扉をほそほそと

唯ひとり叩く乙女

誰？

何もきかず、そつと通して下さい。

その十 駄目なこと

探すといふても駄目なこと

私のすきなその人は

唐天竺にも居やしない



遠い龍宮にも居ない  
何時も動かす私の胸に  
じつと坐て居ますもの

その十一 いつまで子供で

いつまで子供で居ります  
と、お前は言たじあなかつたの

子供で居ると言ひました  
貴方に會たその日まで  
子供の積りで居りました。

その十二 揉消した跡

燃え上らねばやまぬ焰を  
無理に揉消したのです



臭い香、醜い焼残、  
儂い灰に人まぢつて残て居るばかりです。

その十三 たまにや獨りで

たまにや獨りで歩いてみよ  
と、山の木兎言みみずくたけな

たまにや獨りで泣てもみよと

裏で烏からすが音たけな。

その十四 こわい顔

『來い』の片目に  
『行く』のえみ、  
『來られもせぬに』  
と、こわい顔。



その十五 自分のももの

自分のもものとなつてから  
なほも苦しむこの心

『いつそ忘れてしまへ』

寂しさに耐られぬを知るくせに。

その十六 夜は明ける

強い煙草の思出は

しぶい番茶で忘れやう。

どうも思切れぬなら

思切らずに居るまでよ。

泣いても泣いても眠れねば

眠らず居るとも夜は明ける。



その十七 たつた一言

「随分泣たねえ」  
と、たつた一言話してみたい

その十八 病院の窓

病院の窓邊

また首を出すあの娘。  
赤いハートが破れてか  
戀に生血を吸はれてか  
いつも眞青なあの娘。

その十九 リボン

赤いリボンをつけてたら  
今日も逢へると思てね



もしも、リボンが黒ならば  
涙がすべてを話すでせう。

その二十 噛まずに吞だ

端から見れば

美味しい菓子

喰てみたらば

苦い味

喰てうまい  
といふ人は  
噛ずに吞だ  
戀の菓子。

その二十一 ほくろ

貴方はきれい、と言ふくせに



何時も窓からのぞいてる  
ひとが振向きや戸をたてて、  
じらして居ても左頬  
付けた黒子ほくろが物を言ふ。

その二十二 氣附かず過ごす

毎日訪ふ下駄の音

少しも氣附かぬ貴女です

しけしけ視詰る、此眼をも  
忘れて知らぬ貴女です  
焦れ狂ふて死ぬ日にも  
氣附かず過す貴女でせう。

その二十三 戀の糸

切れた糸故取換えませうか  
繫いで弾きませう、音はひくくとも。



その二十四 何が悲しい

何が悲しい

と聞くものがあるか。

常に腹の満されぬ者に

腹がすいて居るか

と聞くものも無からふ

その二十五 手折らず

取らば手のとどく

睡蓮なれば

なほ一段と美しい

望まば折れる乙女なら

手折らず美しく



置きませう。

その二十六 當り矢

あなたの心を射たものは  
氣まぐれの

キエーピットの當矢です

胸の悩みも苦しみも

刺た其の矢の痛みです

その二十七 ほのかにあかし

昨夜の昂奮は何處

何事も忘れしごと

ほのかに紅し

鏡にうつる唇



その二十八 今宵も

苦しきことと、知れるきの  
今宵も人目忍び出で  
暗い闇夜に顫えつつ  
星と一緒に待ちわびる

その二十九 影法師

硝子にうつるその影は  
幸ある若き囁か  
朝日に氣高く、愛らしく。  
頭つむ倚せては、うなづきて  
含羞むさまも美しや



細目にのぞく、窓の外  
暖き陽に紅と紫と  
一つの鉢のチューリップ

その三十 何時まで待つも

冬は過ぎても、來ぬ春に  
硬く蕾は綻びず  
寂しきうちに、獨り居て

何時まで待つも春は來ず。

その三十一 二人の私

悩みも無く、苦しみも忘れ  
平凡に生涯を送りたいと言へば  
短い生涯だもの苦しめるだけ苦しみ  
惱のどん底で喘ぎゆけ、と言ふ



兩方とも實の私  
身が二つになれば  
共に幸福でせうが。

滴りのかづく



待たずに居ても

散來る木の葉

肩に手に。

夕映眺む

處女をこゝろごよ

秋の落葉が

なぜ寂し



赤き人陽が  
何故悲し。

母の手に淨く

銀の針

とまる頃には

春のひが

緑の芽生

よき晴着

胸の血潮を  
湧すため  
待たずに居ても  
來るであろ。

暗き窓

いつまで待つもあの窓に  
君の姿は見えませぬ。



君居ぬ窓邊に咲亂る  
くれないの花、白き花  
今は少しも見えませぬ  
唯夕靄にとざされて、

せめて、灯ともされて  
窓邊たりとも、はつきりと  
待つ兒の瞳にうつしませ。  
君の姿は見えずとも

私の窓に灯をともし  
君の歸りを待ちませう。

### 果敢なき夢

遠い幻、慕ひつつ  
熱い涙で泣たとて  
消えて儂き夢故に  
去たあの日は歸らぬを。



すぎた昔の戀しさに  
今日も亂れた黒髪に  
ひとめを忍び涙する  
未練小雨の降る窓邊。

### ソーダ水の泡

コップの底より浮出る

ソーダ水の泡を見詰て居た  
私の喜びを誰も知らない。

硝子コップのおもてに私を見て居た黒い瞳、  
嬉しいソーダ水  
何時までも細い泡を吹いて居てくれたのですもの



見逃すとも

何故咎む、乙女の秘密

見ても見ず、聞ても知らず、

逃すとも、優しき乙女

唯一つにて永遠に満足するものを

可哀想！

ひそかに奪ひし

一つの心、お返しします

と、眞晝間に泣く。

口 笛

闇夜も暗くありません

口笛吹て待てます。

闇の合圖に待つ人は



私の胸のひと故に  
あの御姿も口笛も  
あなたの眼には見えませぬ。

いとしくばこそ

をとめならぬ身と  
知らずして  
やさしき文の

愛らしや。

をとめならぬ身と  
知らずして  
かける言葉の  
美しや。  
されど、此の身は  
目もふれず



優しき言葉も

耳にのみ。

いとしくばこそ

読みもせず

愛すが故に

耳にのみ。

## 蚊

力盡てか、憊くも

素手に止まりし唯一匹。

寒き世界に残されて

汝もひとりか血も吸わす。

可哀想にと手を出せば

可細き聲に飛でゆく。



蟹の墓

夕べ見附けた

蟹の子の

死骸砂に

埋といた

山百合

貝の墓さえ

建てたのに

朝の砂原

波のあと。

痛みはせぬか、氣遣はる



可細き掌鎌を持ち

籠を脊になす乙女子が

ふと、浮び出す夕霞。

乞へるがままに含羞て

一もと、手渡す山の百合。

薫るは眉か白百合か

赤の襟たすきか、里遠し。

### 氣附かざりし扉

開て戴いた扉

はいつてみて驚たの

廣くて果がないのですもの。

誰も入れぬやうに閉して置て。

何時までも此處に

私一人居たいのですもの。



ピンセット

明<sup>あ</sup>き眞晝の床の上、

若き女の怖れるは

醫<sup>い</sup>師の手にせるピンセット。

紅く顫える耳の端に

呼吸波打つ、ありし日の

想出に觸る、冷えし器具。

痛む眞晝の床の上

若き女の恐れるは

醫師の手にせるピンセット。

名乗れぬ親

悲き望み、闇の海



筐の小舟のきりぎりす。  
名乗れぬ親に會わんとて  
今宵も濱を出たれど。

闇を明せし、子の母は  
慕ふ小舟を待ちもせず  
高く昇りて中空へ。

權も手にせず泣ける子に

月は密かに青き息。  
戻れよ小舟明きまに  
毎夜來るとも、會れねば

丘の芒に宿借りて  
葉末に結ぶ露の端に  
われのうつろを待てよ子よ。



今宵の月

月の光に

誘れて

銀の湖水に

舟を出す。

ありし日

共に、此の舟に

泣ける、遙けき

その人は

今宵も同じ

月を見て

如何な思に

あるべきか。

青き光に



涙ぐみ  
獨り寂しく  
舟を出す。

### 女王の裳

美しき女王の裳  
きたなき小犬のからみつく、  
退けんとする腰元を

女王の裳が庇ふたら  
小犬は、私と同じやうに喜ぶでせう  
と、貧しき小女は言ひました。

### 變らぬ色

君に逢へれば、眼に泪  
きみ見るすべの無き時も  
冷き部屋に涙する。

君の御前の涙にも  
遣瀬無き日の涙にも  
變らぬ色の寂しさよ。

梳 毛

「果知れずの渦巻か  
纏れた梳毛すまひのやうなもの」

姉の言葉が今までは  
ついぞ解けずに居りました。

果無き渦のその中に  
漂ふ貴方の御姿よ。  
何時か纏れしわが心  
悲しき涙、滲む日より  
苦しきものと知りました。



白 指

青白く浮く

屋根の冷たさ

闇を吸ひこむ

樹の茂り。

夜は怖しきものなれど……

足音忍び

夜を忍び

従ひ來る忍び女お

映えし可細き

白指の

ふと觸合た怖しさ。

人の氣色けはいか足音が

啼を止むる草の蟲  
胸のおののき、白指の  
ふと觸合た怖しさ。

時

この若草を敷き、微風に吹かれ  
この軟かき春の光に  
此儘、手取交わし永遠に眠りたい

と、泣きし人。

慈悲深き母となり  
張切る乳總を抑え  
我兒いとし、に  
總てを忘れて居ることであらふ  
幸、不幸、快樂も、悲哀も  
一手に操る、不思議な時よ  
お前の力を驚かすには居られない。



月の碎片

君戀しさに出でし濱  
訪ふ筈もなきものを  
戀する弱身、流れ星  
何故か報せ、と胸騒ぐ。  
冷えし砂原辿りつつ

しぶきに濡れて君呼べば  
聲の消え去る、波の上  
月の碎片の浮き沈み。  
青白き足、黒き跡  
月の光に浮び出で  
遙に續く、磯波よ  
消すな、君への跡なれば

月見草

廣き野邊の月見草

たつたひとつ眼を開く

親も兄弟も居らぬ夕べ

たつた獨り目を見張る。

風も動かず、日の沈む

月見草咲く野に、われひとり  
人無き故につらからず  
獨り居る故微笑えまる。

かかる時こそ

飴賣の吹くチャルメラ

村の入口に消える頃



戦ごとせし村の兒

蚊遣りの煙に目をこする。

焼けてただれし夕映は

果敢無き色と褪消える

かかる時こそ、海の士官の妻の

さめざめと泣く。

### 指 輪

撓みなく揺れる省線電車に

睦じく物語るふたり

一人は方に處女の時代を去らんとするもの

他は去るも今だ、日の淺し。

『包を下して頂載』

網棚へ、腕差延べる時

何故か他はニッコと微笑む

可細き指に、光る指輪を見て。

氣附ける人、顔を紅に染め

「貴女いたすらね」

電車は揺る、撓み無く。

處女は美し

されど

人妻は氣高し。

## 哀の曲

心の糸が

ギターのやうに

自由に

鳴らせるものなれば



踊狂て

はずした調子

合わせて

愉快にひこうもの

樂屋の裏に

佇めば

獨り鳴出す

胸の糸

青、赤、紫

灯ひの消えて

今宵も悲し

哀の曲。

## 女王の惱

劇の女王ヒロイン

昨日、はいつた  
音楽師  
いさな脊廣の  
やせ姿。  
合わせて歌ふ  
悲しさは  
あれで  
妻子の居るそいな。」

麗しく  
戀にかちえし  
身なれども  
初めて見たよな  
黒髪に  
心すくよな  
ヴァイオリン



ビエロ

舞ひし白鳥のお名残か  
舞臺に落ちし、輕き羽  
引けて寂しき、青き灯ひに  
道化役者の、しよんほりと。

拾ひ上げたる白羽の

主は歸宅か、廣舞臺  
音なき暗さに、唯ひとり  
道化役者の物思ひ。

花ごころ

ゆかしき薫り、春の日に  
うすもの纏ひ咲出る、  
蝶よ花よと歌はれど

夢より暗に消える、われ。

眞夏の暑さ、冬の霜

忍び咲く身も、唯三日。

無情は風に、小夜あらし  
舞へよ、踊れの哄の聲。

飲めや、歌えの其の相手

去年こぞ咲く花は、今は土

瞬間つかのま過ぎて消えゆくを

めずるは、誰ぞ、心無や。

散りて、歸らぬ花吹雪

知るひともなし、花ごころ

名残惜むも土の上

祝の酒が身にしみる。



硝子の圍ひ

火  
花

鐵も焼れて、紅に、  
大槌小槌の間より  
火花飛散る心持よき。

戀の焰に君を焼き  
硬き心を意の儘に



鍛えてみたし、春の宵

淡き煙

君は静に前をゆく

腕差延べ

逃さじ、と抱けば

その骸

餘りに軽きそのむくろ

眞の君は前をゆく。

追話し喜び！

其の瞬間

君は煙となりて春の陽に消ゆ。

果敢無き君の悲しや

我腕に抱けるは

永遠に輕き死骸のみ。

小夜中に

苦しきの餘り

噓を吐きぬ。

父母を欺き

君を欺き

われを欺きぬ

「君を忘る」と、

何びとを欺くも

われのみは欺き得ぬ苦しき

「君よ君よ」

小夜中に叫ぶ

惠深き神の赦しを得んと。



翼無き身に

與えられずば何故なげ示す  
雲をも凌ぐ、塔の尖端さき  
輝く指輪、打載せて  
聲高らかに笑ふ魔よ

翼無き身に飛べ、と言ふ

蕾の儘に

術すべ無く日ねもす眺むより  
飛びて果なん、憂き身をば。

わが心まで飛べ、と言ふ

垣根の外に  
咲きし花